医療領域における対人援助職の職業イメージ比較

—医師・看護師と比較したカウンセラーイメージ—

○伊原千晶¹・三保紀裕²

(¹京都学園大学人文学部・²京都学園大学経済経営学部)

キーワード: カウンセラー, 職業イメージ比較, インターネット調査

Comparison of the occupational images of the helping professions in medical fields—doctors, nurses and counselors—

Chiaki IHARA¹, and Norihiro MIHO²

(¹Faculty of Humanities, Kyoto Gakuen Univ., ²Faculty of Economics and Business Administration, Kyoto Gakuen Univ.)

Key Words: Counselor, Comparison of occupational image, Internet research

【問題と目的】

心理職の職域は、福祉・教育・医療・産業・司法と広範囲に亘っている。しかし公認心理師法案中の「当該支援に係る主治医があるときは、その指示を受けなければならない」という箇所を巡る議論でも、医療行為と心理行為の区別が問題になるなど、他の職域と比較して、医療分野においては援助の内容が他職種である医師・看護師と重なることが多い。しかし、心理職側は援助の内容や質が医師や看護師とは異なると考えているが、対象者はどのようにそれぞれの職種を認知しているのかを調べた先行研究は無い。そこで質問紙調査によって、心理職（カウンセラー）の職業イメージを、医師・看護師という医療分野における対人援助職の典型と比較検討することによって、心理職の職業イメージの特徴を明らかにすることとした。

【方法】

調査手続きおよび協力者 調査実施にあたっては、株式会社マクロミルのインターネット調査サービス「QuickMill」を利用した（2014年3月）。医療従事者を除く18歳～54歳までの一般人624名（男性312名、女性312名）を対象に調査を実施した。18～24歳（学生）、25～34歳、35～44歳、45～54歳の4つの年齢層から156名ずつ抽出し（各層それぞれ男女78名ずつ）、各設問への回答を求めた。

測定変数 ①職業価値観尺度（伊原・三保, 2014）：仕事に対する価値観を測定する尺度である。『社会的評価・専門性』『対人関係』『労働条件』『自己価値』の下位尺度からなる（24項目、6件法）。②職業イメージ尺度：特定の仕事（本研究ではカウンセラー・医師・看護師）に対するイメージを測定することを目的とした尺度である（伊原・三保, 2014）。『理知的』『対人親和的』『自己主張的』の下位尺度で構成されている（24項目、6件法）。

【結果と考察】

カウンセラー・医師・看護師間における職業価値観、職業イメージの違いについて検討すべく、一要因分散分析を適用した。結果、全ての下位尺度において有意差がみられた。多重比較の結果をカウンセラーの特徴を中心に整理してみると、『社会的評価・専門性』が医師・看護師よりも有意に高く、『対人関係』では看護師よりも有意に高く、『労働条件』については医師・

看護師よりも有意に高く、『自己価値』は医師よりも有意に低かった。『理知的』では医師よりも有意に低く、『対人親和的』は看護師よりも低い、医師よりも有意に高い値となった。『自己主張的』では医師・看護師よりも有意に低かった。

一方、カウンセラーという仕事のイメージの特徴をプロフィールからみると、『社会的評価・専門性』を構成する項目全てが医師・看護師よりも低い値を示した。項目単位では、「安定した収入が得られる仕事である」「社会的ニーズが高い仕事である」の値が低い点などが特徴的であった。職業イメージを構成する項目では「科学的な」という項目が医師・看護師よりも低い値を示し、逆に「穏やかな」「あたたかい」「共感的な」といった項目は医師・看護師よりも高い値であった。

年代×性別の二要因分散分析を下位尺度ごとに実施したところ、『自己主張的』においてのみ交互作用がみられた。18～24歳の層では、男性の方が女性よりも有意に高い値を示していた。また、女性において45～54歳の層が18～24歳の層よりも有意に得点が高かった。性別の主効果がみられたのは『社会的評価・専門性』『対人関係』『自己価値』『理知的』『対人親和的』であり、いずれの下位尺度においても、女性の方が男性よりも高い値を示していた。年代の主効果がみられたのは『対人親和的』であり、18～24歳の層が他の層よりも有意に高い値を示していた。

カウンセラーの特徴と考えられる穏やかで共感的なイメージは、心理的苦痛を感じて来談する人が求めるものであり、今後も職業的特徴として維持すべきものである。一方科学的ではなく社会的評価や専門性が低い、というイメージについては資格の制定も含めて今後の改善が必要だと考えられる。

性別の主効果は、受容的で柔らかなカウンセラーイメージは女性に適性があると見られ易く、収入は低い労働条件が良い、という事と相まって「女性の仕事」という印象があるからだと考えられる。一方年齢の主効果は、若い年代の方がカウンセラーに接する機会が多いことに起因すると思われる。（本研究は京都学園大学研究助成を受けて実施された。）

図1 職業価値観・職業イメージのパターン比較（左図が職業価値観、右図が職業イメージ）